

増野正兵衛は、明治20年5月14日(陰暦4月22日)におさづけの理を拝戴した。今回は、その後の5月16日(陰暦4月24日)から7月26日(陰暦6月6日)までの「おさしづ」を見てきた。増野家としては、一カ月後の9月4日、増野いと(正兵衛の妻)の「居所障り」に関する「おさしづ」が見られる。それに続く明治20年9月の増野家の割書は以下の通りである。

- ・明治20年9月4日(陰暦7月17日):増野いと居所障りに付伺:同日、増野正兵衛伺:播州地より、招待の上引いても宜しきや伺:家業引続けて宜しきや、休みて宜しきや伺
- ・9月6日(陰暦7月19日):増野正兵衛神戸へ帰る際鼻咳に付伺:同日、春野千代の身の障り伺
- ・9月17日(陰暦8月1日):増野いと居所障り強く俄かに伺
- ・9月18日(陰暦8月2日):増野正兵衛神戸へ帰る時身上障り伺
- ・9月30日(陰暦8月14日):増野正兵衛口中の伺:同日、増野松輔足の伺

以下、これらの「おさしづ」について気づいたことを記していきたい。

9月4日、妻のいと「居所障り」について伺うと、「一つ掛かり、どうでも道、その道どういう道か伝え、一つ処改心、心治まる身治まる。」とあり、いとや周囲の人々に心の入れ替えを望んでおられることが分かる。また、「心景況世界の雑説道のため、雑説道のため」という言葉もある。「雑説」とは「根も葉もない噂」である。増野家の人々がそうした「噂」に心を惑わしていたのか、あるいは、そうした「噂」も、神が「道のため」に聞かせたということであろうか。

同日、さらに正兵衛が、神戸に戻ることや、家業の継続の是非について伺っている。神戸に戻ることにについては「だんへ行けば、心掛け気に掛けずして一里行け、一里治まる。二里行けば、二里治まる」と一つひとつ治めていく道が説かれ、また「家業」については「どう成る、見るよう、先の定めより今の今、一つ定めある」と、将来よりも「今」の心定めについて論されている。

2日後の9月6日、いよいよ神戸に帰るときになって、正兵衛に「鼻咳」の身上の障りが生じた。そこで、再び「おさしづ」を伺うと、「一段々道あって心に治まり付く」と、一つひとつ順序良く通ることが述べられ、また「十分締め、第一早く旬を見て安心さゝねばならん」と、適切な時期を逃さないように論されている。

同日、いと「義姉の春野千代の「身の障り」についても伺っ

ている。そこでは「もうこれ一寸見えて、身の内たんのうの心定め」と、たんのうの心定めが促されている。

それから10日の間に、いと「の痔疾が悪化したようで、神戸からおぢばに帰り、9月17日に「増野いと居所障り強く俄かに伺」と「おさしづ」を伺った。すると、「身の処一つ置き、身の処どんと一つ聞き取り、どんと一つ定めて貰いたい」とあり、なかなか定まらない心定めについて促されている。

そして、次の日の9月18日、再び神戸に戻るにとき、正兵衛にも身上の障りがあったので伺うと、「内々の処というは治め難いものである。そこで外へは心寄せぬよう」と、内を治めることが難しいときにも、外のことには心惹かれてしまわないように注意されている。

9月30日、正兵衛は、口の中の身上の障りについて伺っている。すると、「暫くの間、色々話伝え、話取れ。第一固まるその心、元あち日々一寸話して置け」と、ぢばの話を少しずつでも伝えるように諭されている。

この日は、さらに増野松輔(正兵衛の姉まちの子)の「足の身上の障りについても伺っており、「たんのうの心神に供えてくれ」と諭されている。

「鼻」と「口」

『身上さとし』では、9月6日の「おさしづ」に基づいて「鼻咳は、早く家内の者を安心させよと指示していられるのであろう」と記されている⁽¹⁾。増野家の文脈でいえば、それはおぢば移住に際しての家内の者の不安に対する諭しであると考えられる。ここでは「一段々道あって心に治まり付く」という言葉も見られ、正兵衛に対して、家内の人々に一つひとつ丁寧に応対することを求めているといえよう。

また、『身上さとし』では、9月30日の「おさしづ」から「口中の病は内々談じあってぢば一つの心を治めよと指示されているのであろう」と述べられている⁽²⁾。この「おさしづ」には「一寸何を聞く、聞き遁がし」というお言葉もあり、おそらくぢばの話が家内の者になかなか聞き取ってもらえない状況があったのではないかと考えられる。しかし、「暫くの間、色々話伝え、話取れ」と、ぢばの理について時間をかけて伝えるようにと諭されていることが読み取れる。甥の増野松輔には「たんのうの心神に供えてくれ」と端的に諭されているのに対して、正兵衛には家内の者に対して丁寧に応対するようにと説かれており、増野家の一人ひとりに対してお諭しのニュアンスが異なっていることが印象的である。

[註]

(1) 深谷忠政『教理研究身上さとし—おさしづを中心として』天理教道友社、1962年、83頁。

(2) 同上、88頁。